

真宗教団の原理

— 親鸞における同朋の自覚 —

木 越 康

真宗教団の現在というものが問題とされる時、その形成の歴史が尋ねられ、現在の状況が語られ、その上に立って教団が評価され、また批判され、そのことによって、教団というものの方向性が模索されているように思われる。その時、教学というものは、わば蚊帳の外にされがちとなり、諸社会学者からは、教学自体が教団と矛盾しており、教団に即した教学というものが再構成されねばならないのではないかとまで言われる。また、教団というものの対して教学から発言する場合においても、教団の緊急の課題に込められている切迫した状況の中で、本来の親鸞の思想というのが歪められた形で了解されていくということが起っていると思われる。そのような状況の中で、私は、教団の方向性というものが、教団自体の歴史的具体的状況や反省からだけではなく、教学の中から確かめられねばならないのではないかと、このことを、強く感ずるものである。その意味で、本発表では、その一端として、親鸞の教学の中から、どのような思想的背景をもつてあらわれたのが「同朋・同行」あるいは「われら」の自覚であったのかというところを尋ねたいわけであるが、その時『唯信鈔文意』に示されるように、「具縛の凡愚・屠沽の下類」を「われら」として、そこに自身の同朋同行、すなわち教団を確かめていったことが注目される。

「屠沽の下類」に言及されていく親鸞の共同体とは、具体的にどのような階層によって形成されるのかということについて、特に「悪人」という視点から様々論じられている。もちろん親鸞が社会・仏教界から「悪人」として抑圧される人々との交流を通して、ことにこの「屠沽の下類」という言葉を大切にしていたことは間違いないことであると考えられる。しかし、それによって親鸞が「屠沽の下類」を「われら」とすることを、最下層の者をも救済の対象とする教団であることを強調的に語るものとして了解するならば、そこに「われら」と言って、自覚的に自己の存在を確かめる意味が失われてしまうものと思われる。

この言葉は、単に共同体の外面的様相を伝えるのではなく、共同体の生まれる必然的意義を、内面的に捉えるものとして了解されるものと思われる。つまりそこでは、親鸞の教団観として、「屠沽の下類」が積極的に「われら」とされていくような共同体の質が問われるべきであろう。

そもそも親鸞の教団は、念仏に開かれる僧伽として「行巻」にその生まれる必然的意義が顕揚されるものである。この場合の僧伽という言葉は、本来仏教の歴史において使われるものとは、その意味を異にするものであるが、「行巻」を見れば、真実の行としての念仏の源泉を尋ね、第十七願文に重ねて重誓の偈文を引いて次のように言っている。

為三衆^{ユニタス}開三寶^{ニホウ}藏^{ニホウ}廣^{ニホウ}施^{ニホウ}功^{ニホウ}德^{ニホウ}宝^{ニホウ}常^{ニホウ}於^{ニホウ}三^{ニホウ}衆^{ニホウ}中^{ニホウ}説^{ニホウ}法^{ニホウ}師^{ニホウ}子^{ニホウ}吼^{ニホウ}

ここに諸仏称名実現の具体相として、大衆の中の説法師子吼が誓われるのである。そしてその成就を、異訳の『大經』によって

・ 令^{ニホウ}下^{ニホウ}諸^{ニホウ}仏^{ニホウ}各^{ニホウ}於^{ニホウ}三^{ニホウ}比^{ニホウ}丘^{ニホウ}僧^{ニホウ}大^{ニホウ}衆^{ニホウ}中^{ニホウ}説^{ニホウ}我^{ニホウ}功^{ニホウ}德^{ニホウ}國^{ニホウ}土^{ニホウ}之^{ニホウ}善^{ニホウ}

・ 則^{ニホウ}諸^{ニホウ}比^{ニホウ}丘^{ニホウ}僧^{ニホウ}聞^{ニホウ}三^{ニホウ}仏^{ニホウ}言^{ニホウ}一^{ニホウ}皆^{ニホウ}心^{ニホウ}踊^{ニホウ}躍^{ニホウ}莫^{ニホウ}不^{ニホウ}歡^{ニホウ}喜^{ニホウ}者^{ニホウ}

等と言う。このことは、名号の成就が、僧伽を創っていくということと言うものであり、そこに大悲の願を根源とする称名誕生の具体相が示されるものである。つまり称名ということが、その本質として僧伽を生み出していくことがおさえられているのである。親鸞の「ただ念仏」に開かれる教団誕生の原理が、ここで諸仏称名の願文に求められているわけであるが、その意味で真宗教団の誕生ということを変更して考えるならば、それは法然が生みだすものでなく、親鸞の思想が生み出したものでもないと言わねばならない。つまり本願が「十方衆生」と招喚する、そのなかに自己を発見し、人間を発見する、そこに常に新鮮に僧伽の誕生があると言うべきである。親鸞が一切衆生を「具縛の凡愚・屠沽の下類」とし、そこに「われら」といって自身の共同体を確かめていくことを意味するものである。しかし、そのことは同時に本願の正機としての十方衆生、あるいは大悲の正客としての群萌に衆生を発見するという意味を持つものである。その自覚において、さまざまのものがただ如来の眷属として、「一味平等」であることを共有し得るのである。そこに大悲の願を根柢として生れる称名、つまり大行に開かれていく僧伽の意味が確かめられるものと思われる。清沢満之は、かつて教団の方向性について模索し『教界時言』に

大谷派なる宗門は、大谷派なる宗教的精神の存する所にあり。
 「大谷派宗務革新の方向如何」

と言う。また、「真の朋友」という思索を展開する中に、

真の朋友は宗教的根柢に立(つ)

と言っている。これらの言葉によって、共同体、つまり教団とい

うものの異質化を歎き、形骸化を否定し、その個々の宗教的精神に自覚されていくものであることを主張しようとするのである。まさに真宗教団とは、「十方衆生」の本願の言葉の中に自己を見いだしていくところに開かれ、そこに如来の眷属として「一味平等」の自覚的世界を共有していくという、常に個々の宗教的精神において、主体的に生れる意義が確かめられるべきものであると言えよう。

一つの特別の共同体が生れるには、その生れる必然的意義と、社会に於いて活動するために必要とする形を自ら備えるものである。しかし、その生れる純粹な意義や形は、時代的社会的制約や人間の独善的自己保身によって、必ずしももとの理念・形を維持することができなくなってくる。その意味で共同体は、常にその生まれる必然的意義と形を自ら確かめつつ活動していかなくてはならない。先の清沢満之の教団の異質化と形骸化を歎く言葉も、真宗教団が「生れる」ということについての原点を確かめるものであると考えられる。

繰り返すならば、称名念仏が本願に帰すということを内実とするならば、真宗教団とは、念仏する集団ではなく、如来の眷属として衆生の「一味」なることに自己を発見していくという、そこに常に新鮮に開かれるものである。つまり個々の主体が、その宗教的精神において、存在を自覚的に見出していく世界である。それが、親鸞において念仏の僧伽としてその原理が明らかにされる「同朋同行」なる教団の持つ意味であると言えよう。